新吉原遊郭仲之町猛火大旋風の真景

ここに掲げた絵は石版画で、大正12（1923）年9月1日に発生した関東大震災の際、東京・浅草区（現台東区）新吉原にあった遊郭での、火災旋風の状況を描いたものである。旋風によって、人力車が舞い上がり火災が拡大している様子が描かれている。

１　石版画とは

石版画とは、石版石（石灰岩）の面に脂肪性のインキで絵を描いて製版し、水と脂肪の反撥性を応用して印刷したものをいう。石版画は木版画に比べて歴史が新しく、石版機が江戸末期、ドイツから江戸幕府に献上されたことに始まる。

２　関東大震災の被害状況

今から82年前の1923年9月1日午前11時58分、突如としてマグニチュード7.9の大地震が関東一帯を襲った。被害は、東京、神奈川、埼玉、千葉、栃木、静岡の1府（都）6県にわたり、東京では136か所から火災が発生して、3日間にわたって燃え続けた。

地震発生と同時に多くの家屋が一瞬にして倒壊し、その下敷きとなって多数の死傷者が発生、東京市内は阿鼻叫喚の街と化した。

倒壊した家屋から火の手が上がっても、人々は余震に怯えて消火活動ができず、また水道も断水し、火災は拡大して紅蓮の炎となって地を舐め天を焦がした。

東京全体での被害は、警視庁の「帝都大震災記録」によると、焼失家屋221,718戸、焼失面積1,758,630平方メートル、死者60,420人、行方不明者36,634人、傷者31,051人となっている。

火災旋風は、関東大震災のとき本所（現墨田区）横網町にあった陸軍被服廠跡の空地で、避難していた約4万人の人たちが大旋風によって、一瞬にして炎に包まれ死亡した惨事がよく知られているが、火災旋風は新吉原でも発生していたのである。

３　消防活動の状況

震災時の警視庁消防部（現東京消防庁の前身）の消防力は、消防署6署、消防出張所20所、消防派出所10所、消防職員824人、消防ポンプ車38台、水管車17台、はしご車5台などで、これが現在の東京区部を火災から守っていた。

当時の記録（緒方惟一郎消防部長著「何故に災害が大きくなったか」）から抜粋して、消防活動の状況を見てみよう。

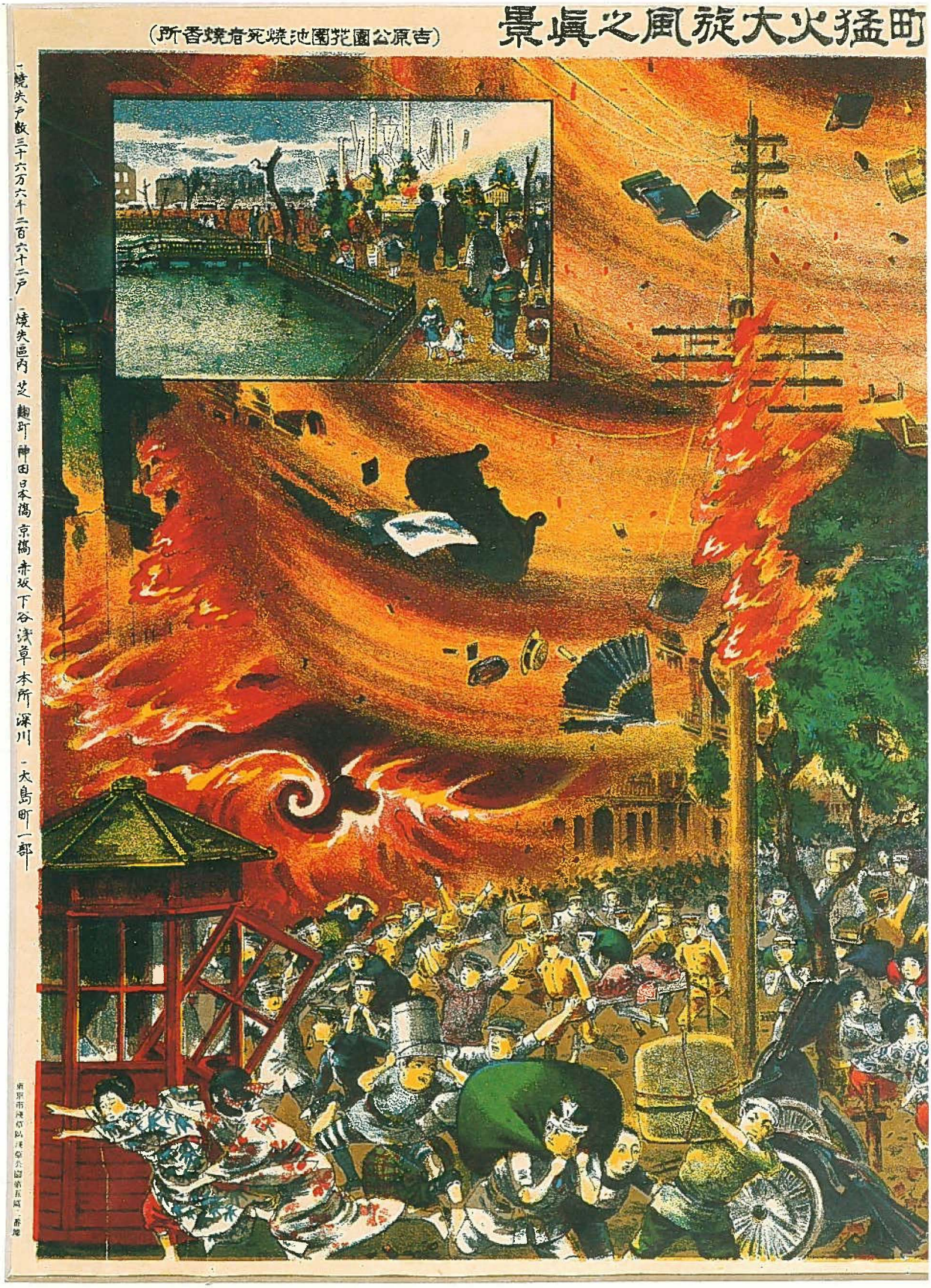
「消防隊は、到る所で悪戦苦闘した。而かも余りに発火の地点が多くて、消し止め得なかつた方面から強風も混合されて、実に凄惨を極めた。最初の風力は14～15メートルであつたが、漸次増加してきて夕方には20メートル以上の風力になつていた。しかも火勢が強い区域においては、部分的に局部・局部に気流を生じて、風向は東西南北に変動するという状態であつた。

また地震のため破壊した家屋の屋根瓦が、ことごとく剥離して飛火してくる所が、ことごとく発火するという状態になつた。且つ強風に煽られた炎は、頗る遠距離まで到達した。

殊に困つたのは震動と同時に、火災電話その他の通信機関が全体に断絶し、消防各隊の連絡統一は、一時全く失われたことで、伝令その他の方法までも途中においては妨げられ、自ら時間を空費して連絡に困難を感じたのは、返す返すも遺憾であつた。」

このような絵図や記録を見ると、大震災時の火災が余りにも大きく、消防隊が対応しきれない無念さがまざまざと伝わってくる。

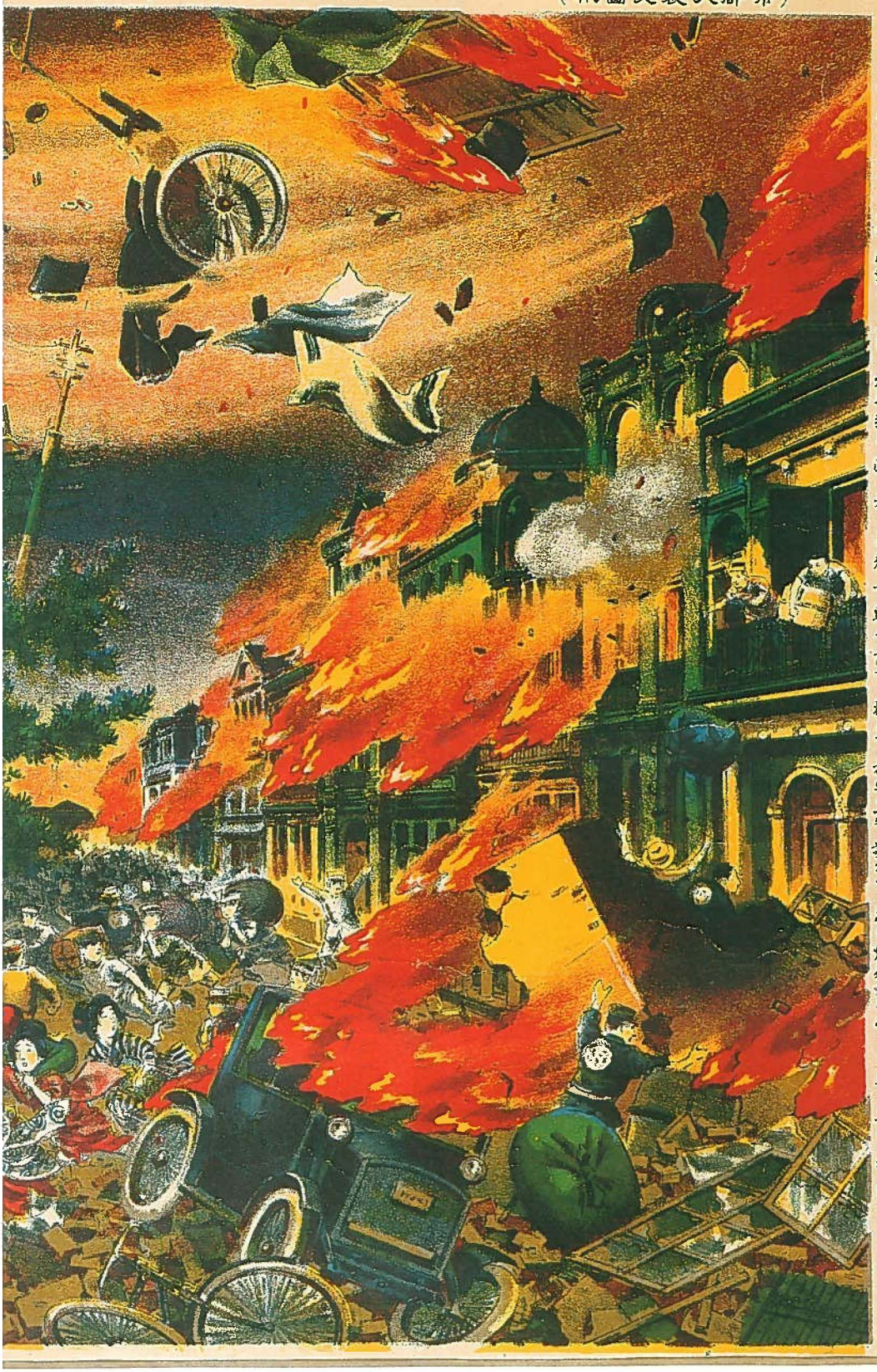
白井和雄（元東京消防庁消防博物館長）



「新吉原遊郭仲之町猛火大旋風の真景」（東京消防庁消防博物館蔵）

新吉原遊廓仲之

（帝都大震災畫報）



大正十二年九月一日午前十一時五十八分關東地方未曾有の大震起り地ハ龜裂を生じ家屋ハ倒壞し東京市内ハ八十余箇所より火災起り一面火の海と化し水道ハ斷水し風勢猛烈なりて消防ニ術なく焼失家屋三十六万余ノ死者七八万余負傷者其數算し難く殊ニ本所方面の避難者ハ互ニ安全地ニ逃げんとせしも各橋墜落し交通杜絶せるる為其多數ハ吉原町方面の廣場ニ避難せしに一陣の旋風ハ猛火の渦を巻きあげ群集の頭上ニ落下し搬出せる荷物の一時ニ發火せし為ニ焼死者幾出しるる景も甚大の場所なり